

第71回 記者懇談会実施概要

1 日 時 2010年11月1日(月) 15:00~17:00

2 場 所 関西大学会館 100周年記念会館 第2会議室

3 内 容

(1) 研究発表・質疑応答 (15:00~16:00)

- ・ 池見 陽 臨床心理専門職大学院教授

発表テーマ「カウンセリングで気持ちはどのようにして変わるのか

—この夏の海外講演や著作を通して発信していること—

- ・ 鶴田浩章 環境都市工学部准教授

発表テーマ「『コンクリートから人へ』の方針の下での

コンクリート構造物の長寿命化への取組み」

(2) 学内状況説明・情報交換 (16:00~17:00)

- ① 関西四大学「薬物に関する意識調査」集計結果報告書について 資料1
- ② 第30回「地方の時代」映像祭2010贈賞式の開催について 資料2
- ③ 統一学園祭2010の開催について 資料3
- ④ 高槻ミュージックキャンパス震災訓練の実施について 資料4
- ⑤ 1・2年次生父母・保護者対象 就職説明懇談会の開催について 資料5
- ⑥ 文部科学省「スポーツ功労団体表彰」の受賞について 資料なし
- ⑦ 関大生の活躍について 資料6

4 大学側出席者

楠見晴重学長、黒田勇副学長、本西泰三学長補佐、
池見陽臨床心理専門職大学院教授、鶴田浩章環境都市工学部准教授、
河野和宏社会安全学部助教、
横山博行広報室長、中川雄弘広報課長、竹中敏治学長課長 他

5 参考資料

- (1) 関西大学通信 第385号、第386号、第387号
- (2) 文化財保存修復研究拠点 国際研究集会 チラシ
- (3) 先端科学技術推進機構 合同研究部門別発表会 チラシ
- (4) STEP (社会的信頼システム創生センター) 第1回STEP-upセミナー チラシ
- (5) 行事予定表 (11月~12月)

以 上

カウンセリングで気持ちはどのようにして変わるのか --この夏の海外講演や著作を通して発信していること--

臨床心理専門職大学院教授 池見 陽

【概要】

ストレスやメンタルヘルスなど、心の健康の維持・増進は広く社会全般に及ぶニーズとなってきた。これに対して、医学研究においては各種の治療薬の開発が進む一方、人と人の対話による心理療法、カウンセリングやセラピー（以下「カウンセリング」）への期待も大きい。また、精神科疾患や心療内科疾患など明らかな疾患がないけれどストレス感が高い場合や「本当の自分を知りたい」場合などは、特にカウンセリングが望まれている。

筆者は臨床心理士として心療内科、精神科や企業の健康相談室などにこれまで勤務し、日本では広く使われているカウンセリングの方法である「クライアント中心療法」を研究してきた。とくに、「フォーカシング」と呼ばれるクライアント中心療法を発展させた方法を専門にしており、これまでの研究成果の一部を今年の2月に著作にまとめた。この夏はローマで行われたクライアント中心療法の国際会議（The 9th World Association of Person-Centered and Experiential Psychotherapy and Counseling 6月28日～7月4日）でその内容を基調講演し、さらに、アテネ、上海（9月3～6日）などで講演やワークショップを行ってきた。

著作は日本の臨床心理学では初めての「小説仕立て」となっており、完全に「一人称」で執筆したものである。カウンセリングは誰が実施しても同じ技術ではない。音楽の演奏と同じように、人に与えるインパクトは演奏者の個性であり、五線紙上のスコア（楽譜）ではない。そこで、「僕の」カウンセリングの実際の記録や「僕の」カウンセリングに対する思いを紹介した。

その論考では、心や気持ちをメカニズムと考えるのではなく、それを過程ととらえ、気持ちはいつも「次なるものを暗に示している」とした。気持ちはそもそも変化するもので、人は暗在知（implicit knowing）を明在的な概念、言葉や芸術象徴などを用いて言い表し、その明在的な象徴は再び暗在を呼び起こす。クライアント（相談者）とカウンセラー両者の感じられた感覚を介して、暗在⇒明在⇒暗在の絶え間ない循環が意味を新しく進展させていく。

「感じることを大切に」とはよく言われることだが、「感じる」とはどのような過程なのか、どのようにして「大切に」するのか、など具体的な例が求められる。また、感じられている暗在知に触れて、それを言い表していくことは、カウンセリングに限らず、今日の生活に必要な知の鍵を開くことになるだろう。

【プロフィール】

1957年兵庫県生まれ。Boston College (BA), University of Chicago (MA), 産業医科大学（医学博士）。北九州市立小倉病院臨床心理士、産業医科大学講師、岡山大学教育学部助教授、神戸女学院大学教授、同大学教務部長、関西大学文学部教授を経て現職。著書「心のメッセージを聴く」（講談社現代新書）、「僕のフォーカシング＝カウンセリング：ひとときの生を言い表す」（創元社）など多数。The Focusing Institute (USA), Board of Directors, *Person Centered & Experiential Psychotherapies* 編集委員など。

「コンクリートから人へ」の方針の下での コンクリート構造物の長寿命化への取組み

環境都市工学部准教授 鶴田浩章

【概要】

民主党政権の誕生とともに脚光を浴びた「コンクリートから人へ」という予算配分の方針は、現在こそ少しくトーンダウンしたが、その影響力は予想以上に大きかった。公共事業は、減らせ減らせの号令で激減して、政治の混迷や方針の不明確さから経済も停滞し、不景気から抜け出せず、国民は閉塞感にさいなまれている。

その矢面に立たされているコンクリート構造物に目を向けると、日本の復興や高度経済成長に寄与して、災害に強い社会構築に貢献してきたものの、マスコミからは悪者扱いされることが多い。その構造物がいよいよ危機に瀕することになろうとしている。これまでに構築され、我々の生活を支えてきた構造物の老朽化が顕著となり、2036年には既存の道路橋の50%以上が橋齢50年を超えると予想されている。さらに、米国ミネアポリスでの建設後40年の橋の落橋やハリケーンカトリーナの被害等の一要因と言われる「荒廃するアメリカ」と言われた実情が、日本でも再現されるのではないかとの危惧が生まれている。すなわち、経済の行き詰まり、建設・補修補強分野の疲弊や技術者不足などで、補修補強をして長持ちさせないといけない構造物に手がかけられず、老朽化を止められない状況が続き、治安が乱れ日本社会が混乱すると予想されている。

そこで、「荒廃する日本」にしないために今できることは何かを考え、安心安全な社会の構築に寄与する技術の開発を目指すことが重要だと感じている。今回は、現在の研究テーマの中からコンクリート構造物の新たな表面保護材料の開発の取組みを紹介する。この取組みは、まだ検討途上であるが、コンクリートの表面に表面保護材料を塗布あるいは溶射することにより、表面からの劣化因子の浸透を抑制し、コンクリート内部の鉄筋の腐食発生を遅延させることにより、コンクリート構造物の耐久性を向上させようというものがある。既存の材料とは異なる新しい材料の開発の状況を紹介する。

【プロフィール】

1967年熊本県生まれ。関西大学環境都市工学部准教授、環境都市工学部入試主任。専門は、土木材料学、コンクリート工学。九州大学工学部卒業、九州大学大学院工学研究科修士課程修了。九州大学大学院助教授を経て、2005年4月関西大学助教授に着任、07年4月より現職。工学博士。現在の主な研究テーマは、産業廃棄物のコンクリート材料への適用と環境への影響、コンクリートの耐久性改善策としての表面保護工法の開発、コンクリート構造物の劣化予測など。趣味はテニスとソフトボール。